



高崎経済大学
経済学部 教授
水口 剛氏

1984年、筑波大学卒。ニチメン入社。89年10月、英和監査法人入所。90年9月、TAC入社。97年4月、高崎経済大学経済学部講師、2000年4月、同准教授。08年4月、同教授。

著書に『責任ある投資-資金の流れで未来を変える』（岩波書店、2013年）、『ESG投資-資本主義の新しいかたち』（日本経済新聞出版社、2017年）、『サステナブルファイナンスの時代-ESG/SDGsと債券市場』（編著、さんざい、2019年）など多数。

朝日工業社コーポレートレポートを読んで

創立95周年おめでとうございます。この間、一貫して空調技術を中心に技術力を高め、社会に貢献されてきたことに敬意を表します。2025年の100周年に向けて、今年、新たな中期経営計画「SPEED UP-PLAN 17」がスタートしました。その重点項目の第1にSDGs経営の推進を掲げられていることに注目したいと思います。トップメッセージの中でも脱炭素社会の実現に向けて貢献していく決意が述べられており、すばらしいことだと思います。

その決意をより具体的なものにするためにも、事業を通じた脱炭素化への貢献をより分かりやすく伝える工夫をされるとよいのではないのでしょうか。例えば今回の報告書では、特集としてCGS排熱温水を有効利用するなどして省エネ効果の高いデシカント空調機の導入や、ビル・エネルギー管理システム（BEMS）によるエネルギー効率向上などの事例が紹介されています。また、自然エネルギーを活用した環境配慮型の市庁舎の建設の事例もあります。これらの説明自体は分かりやすいですし、優れた取り組みとして高く評価したいと思います。

そこで、このような建物の省エネルギーに大きく貢献する工事を、その脱炭素化への貢献度合いに応じて分類して、名前を付けてみてはどうかと思うのです。例えば最高品質の

工事を「パリ協定整合設備工事」、それに次ぐものを「グリーン設備工事」といった具合にです。ちょうど一般の事業者が自社製品に「グリーン製品」「環境配慮型製品」といったラベルを貼るのと同じです。

請負工事という性質上、施主の意向が反映されるので、すべての工事を最高品質にすることは難しいのかもしれませんが、それでも全設備工事売上高の何割を最高品質の設備にするといった数値目標を示されれば、御社の脱炭素社会への貢献度をより分かりやすく伝えることができると思います。

今年は新型コロナウイルス感染症が社会と経済を直撃しました。本報告書に掲載された空調設備による感染症対策の技術提案を高く評価します。なるほど、御社の「空気の質を制御する技術」が生かされる新たな機会と言えるでしょう。他方、今回の新型コロナウイルス感染症は、ESGの「S」の課題への注目を高めました。感染症対策を取りたくても取れない人々の存在は、社会における経済的不平等の存在を浮き彫りにしたからです。御社は「働きやすい職場づくり」を通じて従業員の安全にも十分配慮されてきたことと思いますが、今後はより広い視点から「S」の課題にも取り組まれることを期待します。

第三者意見を受けて

水口先生には、昨年、一昨年に引き続き貴重なご意見を賜り、誠にありがとうございました。

当社は2020年4月で創立95周年を迎えましたが、創業以来、空気・水・熱のエンジニアリング企業として培ってきた省エネルギー技術や新型コロナウイルスなどの感染症対策に関する技術を評価いただきましたことは、当社が事業活動を展開していく上で、非常に勇気づけられるものであります。

第17次中期経営計画で掲げた「SDGs経営の推進」についてはこれから具体的に取り組んでまいります。水口先生にご提案いただいた脱炭素社会への貢献やより広い視点でのESGの「S」への取り組みも参考とさせていただき、持続可能な社会の実現に貢献してまいりたいと考えております。

今後とも、忌憚のないご意見を賜りますようお願い申し上げます。



執行役員 社長室担当
兼 経営企画室長
岡本 如司